0・5

予定はギッシリ埋まっているワケでもなく、僕の今日の予定は一つだけ。それが終わったら何もなく、家に帰っていつも通り、こもっているだけだと思う。正直それ以外やる事もないし、あまり外に出たいとも思わない。

ヒキコモリ……ニュアンスは近いかもしれないけど、正直そこまで酷くはない。一日中SPCに向かって何かをしているワケでもなくて、彼女が居るワケでもなくて、友達がそんなに居るワケでもなくて……本当にやる事もないから家でぼーっとしてるだけ。

ただ一つ、僕の中で趣味と呼べるものがあるとすれば、少女漫画だと思う。

うん、僕、男の子。でも少女漫画大好きだし、裁縫もする。お父さんとお母さんは弁護士で、いつも家に居るとは限らないから、料理もする。一般常識で言うと、女の子がするような事を、僕は男の子だけどしてる。

少女漫画は本当に面白い。何だろう、知らない世界が広がっていて、本当の恋愛がここにある。――良いよね、恋愛。自分自身はしないけど、こうして漫画の世界で視ていると甘い気分になる。

にやにや、と笑っている僕は周りが視えていない……って、数少ない友達が言ってくれた言葉で、最初はその意味が全くわからなかったんだけど、今なら理解出来る。

――結局、電車の中で少女漫画を読み続けた結果、目的の駅を通り過ぎたワケでありまして……SPCのメールボックスには友達のユカの文句メールが三十通もあるワケでありまして……

もはや嫌がらせの類だと思うけど自分が悪いから謝る事しか出来ない。ユカの嫌なところは電話を掛けてくるんじゃなくて、メールで何通もネチネチといたぶってくるところなんだけどなぁ。

アイディスプレイの右下にある時刻をチラ視すると、時刻は八時。拙い！　あと一時間で受付が終わっちゃう！　ごめんユカ、先行っててー。

とかメールを出す前に――

『先行ってるよドアホ』

――先手必勝だね。最初から待つ気もなかったのね……あはは。

アイディスプレイをつけての歩行は禁止区域があるから、僕は外す。人とぶつかっちゃうとトラブルの元だから仕方ない。僕も出来るだけ、そんなトラブルは起こしたくないし。……SPCのモニターモードをオフにして、別プログラムを起動させると、電車から急いで出る。

早く行かないと……SPCなくても、腕時計があるから時間はわかる……時刻は八時半。急いで行けば間に合うかな！？

はぁはぁ――……息をあがらせて、階段を走り抜けると、地上の、太陽の光が待っている。地下鉄の面倒なところは、いちいち地上にあがる為に階段を登らなきゃいけないところだよね。これだけはどうしようもない。

定期をSPC越しに提示して、改札を抜けると、駅の外に出る。そういえば、学校に向かうバスとかあったよね。急いでバス乗り場に向かうと――よかった！　あと一分！　ギリギリセーフ！

セーフのポーズを心の中でとって、列に並ぶ。これで間に合うかな……？　徒歩で三十分ぐらいって言ってたから、何とかなるかな。バスが渋滞にはまらなければ十五分ちょいで着くと予想。と、なると、バスの中でまた漫画とか読んでいると時間を忘れちゃうのかな……今回は自重しよう。

二分後、銀色のボディに赤のラインが入ったバスが現れて、並んでいる人たちと一緒にバスの中に入る。適当な席に目をつけて、座ると、バッグを目の前に持ってくる。SPCはポケットの中だから、ぽ

んぽん――――大丈夫、落としてない。

ふぅ……良かったぁ、バスに乗れて。乗り過ごしてたら多分、本当に間に合わなかったと思う。徒歩三十分だから……っ。

自分の席で背伸びを一つして、息を整える。バス停まで全力疾走で来たから、本当に、もう肺が痛い。乗っている間に息を整えて、学校に入ろう。

あ、ユカにメールしとこ……間に合いそうだよってね。

SPCを取り出すと、レーザーモニターを展開する。アイディスプレイは基本音声モードだから、ここでするのはちょっとね、うるさいと思うし。でもレーザーディスプレイって、反応が遅かったり、処理に時間が掛かるからちょっと苦手なんだよね。モニターがレーザーだから、あんまり良く視えないし。

技術が進んでも、次の問題はレーザー可視ディスプレイの上に綺麗に映像を載せる技術を研究した方が良いと思う。だから電子書籍は未だにディスプレイ式の方が綺麗だしね。でもディスプレイは邪魔だし……早くレーザー技術、発展してくれると良いんだけどね。――――どうでも良いけど、目からビームとか出せたら良いなぁ……――――

うとうとと、眠気が襲ってくる。今日は良い天気だし、本当に春だと思う陽気で、こう云う日は、やっぱり公園の芝生の上とかで少女漫画を読んでいると、こう、うとうとっ、となってお昼寝しちゃうんだよねー。

でも今寝ちゃうとさっきの二の舞だから、我慢我慢。SPCのディスプレイを仕舞って、外を眺めると――――、やっぱり、僕と一緒で遅刻しそうな人たちかな、同じ制服を着た集団が走っている。察するに、一緒に学校行こうね、って約束したのは良いけど、一人か二人、遅れて結局このままじゃ拙いから走っている、ってところかな。人の事言える義理じゃないからこれ以上何も言わないけど、ちゃんとスケジュールとかチェックして、携帯電話でも良いけど、目覚ましアラームとか掛けておかないと。苦労するよ、本当に、これからは今日よりも一時間早く学校に行かないといけないんだから。

バスは走り去って、集団を通り過ぎる。いずれ視えなくなって次の景色に切り替わる。まるで、紙芝居のように、次へ、次へと、場面と物語が変わっていく。

詩人みたいな言葉を心の中で呟いて、僕は紙芝居と云う名の現実を眺めていく。

……二十分。受付終了十分前に、今日から通う『都立東線高等学校』の正門にたどり着いた。良かった、バスが全然知らない場所に止まったらどうしよう、と思ってたけど、学校の正面に止まってくれて良かった。

感謝の言葉を呟いて、門の隣に設置されている、平成三十七年度入学式の看板を眺める。

本当に、僕はこの学校に入学出来たんだな。

資料の中に入っている合格通知を取り出して、受付のあると思う正面玄関の中に入る。

受付には……えー……と。何か……凄い、巨大なバットを構えている男の人が。せ、先輩、ですかね？　野球部の方でしょうか？　一歩、後ろに下がって様子を眺める。うう、怖いよ、あの人目つき怖ッ！　不良さんですかっ！？

ま、ま、まずは冷静になろう！　この学校は、芸能学部とスポーツ学部が存在している学校で、芸能学部に所属している学生さんは、基本、学校を多く休む傾向のある、芸能人の方々が入るような場所です。随分前から、二年生時に選択するコースに、デザインコースが設立されたので、その年から一般生徒の入学も増えたって言っていますけど、それでも基本、芸能人さんが多い学校で、少人数授業になっているとは聞いています。目の前の人は……芸能人さんですっ！　きっとそうです！　スポーツ学部に通うあまりよろしくない人柄の人じゃないはず

……あくまで〝はず〟です……

受付に居るって事は、あの人から受付を取らないと先に進めない訳ですよね？　時計を視ると、時刻は、わーっ！　もう少しで受付が終わっちゃう時間だ！　いい加減に決めないと時間が拙い。

向こう側ももう気づいているかなぁ、僕の存在を。言えないですよ、先輩（らしき人）に怖いから受付を出来ませんなんて。つか、僕以外に居るんでしょうか、そんな事で受付をしない人。

迷っている暇はない、このまま行くぞぉ！

「何してるの？　キミ？　新入生？」

「うひゃあああああっ！」

後ろから女の子の手がぁあああ！

「お、女の子みたいな悲鳴をあげたねー」

「あ、あああああ、ああ、あ」

「ごめんねー、驚かせちゃって。……ここで止まっているって事は……あー、やっぱり、今日これで五人目だよ。

ちょっとー、赤城くーん？」

女の子は腰に手を当てて、すたすたとバットを構えた不良先輩さんの元に歩いていく。

「ん？　何さ？　真面目にやってるぞ、今は」

「そうじゃなくて、今日の通算五人目の子です。恐怖で怯えている子が」

指を刺されて肩を反射的にあげる。ギロリと、男の人の目つきもこちら側を刺す。ど、どもー……

「目つきが怖いんだよ、赤城くんは」

「そんなもん、オレに言われたところでどうしようもない事だっつーの。生まれつきだ、生まれつき！」

バットを片手に、手でジェスチャーをする。そ、そこまで悪い人じゃないっぽい……？

「そもそも、深田さんが居ないんだからそんなものを持ってても……」

「何を言っているんだよ！　もしあの人に何かがあったらどうするんだよ！　いつでも出動しておけるように、バットを持っているだけだ！」

「……その情熱が別の方向に行かないのよねー、赤城くんって」

「知った事か！　他の事はただのついでだ！」

「じゃあ、この面倒くさい受付の空きを受け入れてくれたのも、ついで？」

「ああ、ついでだ！」

……あのー、そろそろ良いですか？　時計を視ると、もう時間三分前ぐらいなんですけど……？

「ん、ああ、わりぃわりぃ。ほれ、合格通知貸せよ。忘れてくるヤツ多いんだよな。お前は、ちゃんと忘れなかったな、よし」

忘れる人、多いんすか？

「居るぞ。――ったく、忘れるとこっちの手間が掛かるんだっつーの――」

苛立つ先輩さん。その気持ちをわからない事もありませんけど、うーん、どうなんでしょうかねー。

話的には、合格通知を持ってこない人に対しては、わざわざ職員室に行って、合格者の確認をしないといけないみたいです。それをするのが毎回、この不良（らしき）先輩さんなのだそうです。さらにさらに！　合格通知がわからないと、芸能学部かも、スポーツ学部かもわからない訳でありまして、当然のように、両方の職員室に行かなきゃいけないのでして……うわぁ、学校の敷地を踏まえて考えると面倒だなぁ……凄い距離ありそう。ちょっと同情する、かな？

とにかく！　今は体育館に向かわないと！　入学式始まっちゃう！

「あ、それなら庭を経由して行くと近道だよー」

「そうなんですか？」

「うん。もう始まっちゃってるから、早く行った方が良いよ」

ありがとうございます！　それじゃあ……

庭に行く為に一旦また正面玄関を抜けて、庭に入り込む。……途中で、一人、短髪の人とすれ違う…

…あの人も僕と同じなのかな……？

――――――――――迷ったッ！

腕時計を眺めると、正門を出てからもう十分近く経ってるんだけど……うーん、ここがどこなのか全くわからない！　うぉー、あの女の人先輩に聞いておけばよかったぁあああああッ！　マジでぇぇえええ！　――と、とにかく、冷静に、一旦来た道を戻った方が良いような気がします。その方が良いに決まっています。

そうと決まれば戻りましょう！　そう思って、振り向くと……

「あ」

「――うぇ」

……どこかで視た顔が、そこにはあった。えーと……どこかで……あっ！

思わず指を差して声をあげてしまった。そうだ、思い出した、この人はあの時正面玄関ですれ違った時に視た人だ！　短髪のイメージで覚えてた！　でもどうして僕の後ろに居るんだろうか……

「あははは―、いやー迷っちゃってさー……着いていけばたどり着くかと思ったんですけど――」

「えーと……僕も迷ってんスけど……」

正直な話です。

「あー、本当ですか、それ。ま、何とかなるでしょう！　あははは」

この人、能天気な人だなぁ。初日からこうなってると、結構危ないと思うんだけど……

「あ、俺、雨宮カレンです。ヨロシク」

「うぇ、あ、はぃ――二ノ宮、リンです」

「そんなカタクならないでさ、な？」

「は、はい……」

この人、凄く良い人だ……うん。友達になれそうです。

「でもこの状況は参ったね」

「そうっすね。……とにかく、一旦戻りましょうか？」

「ですね」

それが一番得策だし、確実だ。遅れるのは仕方ないけど、式に出ないよりは幾分かマシだよ。……僕たちの意見、あっているよね？

「勿論ですよ。さすがに式に出ないのは拙いですからね」

おもいっきりの笑顔で言われても少しあれだけど、まぁ、良しとしましょう。今頃、ユカも呆れているだろうなぁ、間に合うってメールを送ったのに結局庭で道に迷ってしまうなんて……はぁ。

「ちぇけらー」

うわっ！

突然、通りかかった上の木の中から、一人の男の子が出てきた！　なになに！　なんで、なんでそんなところから出てきたのさっ！？

「うぉう、のー、もうこんな時間だっ……ぜ。おーまいがっ、早く来過ぎて昼寝ってたってのにYOッ……」

すっごく静かに、そんな滅茶苦茶な言葉遣いで現状を把握されても、こっちは混乱するんですけど、あなた誰ですか、って話になるんす。ええ。

「うぇいく。そうか……ミスタ、二ノ宮っ、だな」

「え、僕の名前知ってるんスか……？」

怖い怖い……えーっと、どうしてでしょうか？

「とーのに聞いた」

「とーの……とおの……遠野！　ユカを知ってるの！？」

「ざっつらいと――ちぇけらっちょ！」

ぐるりと一回転して、その男の子は僕とカレンさんの目の前に降りる。逆さまにぶら下がってたからわからなかったけど、この人、凄く髪が長くて、バンダナでそれをあげているような感覚。首を二、三回回して、男の子は、指を差す。な、なんですか？

「れっつ、ごー……」

「え？」
「にゅうがくしき」
「あ！」
カレンさんと顔を見合わせて、微笑する。
もしかして、場所を知っているんですか！？
「……あーーーっ」
頭に手を当てながら……何かを考えています。……嫌な予感がします。
「おーけぇ、着いてきな」
一応、わかるみたいですね、良かったです。
「それより、キミの名前は？」
隣で腕を頭の後ろで組んで歩くカレンさんが、そう問い掛ける。
――と、びしっ、と親指を立てて、自分を差すと。
「ノゾミ。那古、ノゾミ……」
「よろしく」
「ヨロシク、とぅもろぅ、あんど、フォエヴァー」
それは、永遠によろしくって、事でしょうかね？
「ざっつらいと」
あ、そうみたいです。
……しばらくすると、体育館が視えてきた！　本当にたどり着いたみたいです！
前を歩いているノゾミさんに感謝です！
「カンシャ？　ホワイ？」
「だって……連れてきてくれたっす」
「……トモダチ？」
「え？」
「これで、マブダチ、か？」
「はい！」
「……ありがとう、リン」
……この人、少し変な人ですけど、多分、不器用なだけです。音楽とか、ラップとかに乗せないと会話出来ないのも、素直じゃないから、感情表現がそうじゃないと出来ないから。
うん！　でも良かったぁ！

「……今到着かい？」
……浮かれている僕とカレンさんを余所に、男の人が、こちらに向かってくる。
うわ、すっごい、カッコイイ人……
「あ、俺この人知ってます」
「……奇遇だ、な、マイフレンド……」
「え、僕しらないっす」
うーん、どこかで視た事、ってか、会った事ありましたっけ？
「僕の名前は藤咲ヒナ。この学校の『右翼生徒会長』だよ」
「せ、生徒会長さんっっっっ！？」
驚く僕は一歩後ろに下がると、それを視た生徒会長さんが、一歩前に出て、前屈みに、僕の顔を視る。
――そして一言。
「……キミ、可愛いね、女の子？」
何を突然！？　驚きと驚きのコンボですっ！
「僕は男です。良く言われます、女顔だって」
「え！　ごめんね、本当に！　気に障ったなら、謝るよ！」
「いえ！　本当の事なんで……うう」
あ、涙が。
「おぅ、てぃあーず。コイツ、ファイト、売ってる？」
「いやー、違うと思いますよ、那古さん」
そうです、この人は僕たちがどうして今来たのかを問うてる訳でして、決して、悪気があって僕に、女顔とか、そんな事を言った訳じゃないって、僕、信じてる……うん。
「あはははは、君たち面白いね。
いいよ、僕が弁解しておいてあげるよ。さ、体育館に入って――
二ノ宮リンくん」
ウインクを一つして、名乗ってもいないのに生徒

会長さんは、体育館に僕たちを入れる。

◇

生徒会長さんに場所を指差されて、そのまま僕は連れて行かれる。途中で、ノゾミさんが手を挙げて、向こう側に居るユカを視つける。……ここまで長かったぁー。

立って、副校長先生の話を聞いている他の生徒さんたちに謝りながら奥に進んで、自分たちの場所にたどり着く。

「ヴェリィろんぐろんぐストーリィだった……」

頭を掻きながらそんな事をノゾミさんがユカに向かって呟くと、ユカはため息を吐いて、僕の方を向く。

「……間に合うんじゃなかったのかよ……アホ」

ご、ごめん……道に迷っちゃって。

「はぁ。お前の方向音痴にはつくづく頭が下がるよ。よくもまぁそんなに迷子になる事が出来るな、オマエ」

それを言われると返す言葉が見つからない……

っ！　事実だし、でも自分自身じゃどうにもならない事と云うか何と云うか。

考えている隙に、視線がカレンの方角に向かう。

――あ、同じく迷子になっていた雨宮カレンさんです。

「ちわ」

「……まぁ良いか、リンが許したんなら、良いか……ヨロシクな雨宮」

「うん？」

首をかしげるカレンさん。今の言葉の意味が少し理解出来なかったみたいですけど、まぁその辺りはあんまり深くツッコまないでください。話すと長くなりますし、色々とプライベートな事実も暴露されちゃうと云うオマケつきなので。

わかってくれたのか、変わらない笑顔で、手を振った。そして人ごみにまみれて別の方向へと歩いて行った。さっき生徒会長さんと会っていた時に、スポーツ学部の人だって言っていましたから、そっちの方に行ったんだと思います。

ここに残った僕とユカとノゾミさんは、このままここで副校長先生のありがたーい（教師曰く）話を聞こうと思います。

……そういえば、クラス分けとかって、どうなっているんだろう？　受付をする前に壁に貼ってあるかと思ったけど何もなかったし、不良先輩さんにも何も言われなかったですし……生徒会長さんも、学部の人はこっち、とは言いましたけど、クラスはどこだとは言っていなかった。

悩む僕の耳元にユカが言葉を呟く。

「クラス分けは、明日の授業前で決められるらしい。今日は入学式と資料を貰って帰るだけだ」

え、それじゃあ午後に帰宅とか書いてあったのはどうなったのかな……

「しらねーのかよ」

後ろをチラ視して、ユカはさらに声をひそめる。

「この学院の投資者の息子がこの学校に居てな、その人間の思考で今日は資料提出だけで終了になったらしいぜ。

その人サマサマだよな。面倒くさい説明とか、全部明日に回るらしいから」

そ、そんな人が居るんだぁ……でもそれって、学校的に良いのかな？　自分の家が投資する学校にその人の息子が通うなんて。

「家で家庭教師を雇っているような感覚だろ？　金持ちなんだからよぉ」

ふぅーん。ま、ともかく早く帰れるに越した事はないよね。僕途中で本屋寄るし。

あー、また少女漫画だぁー、なんて言葉はしゃべらせないよ。ユカの口を塞いで先手必勝。さすがに他の人にそんな事をカミングアウトしたら引かれちゃうから。教えているの、ユカだけなんだから秘密

ぐらいは守ってよね！

ふがふが、と声を放つ……〝わかった〟って言っているんだと思いたい。そうじゃなかったらもう絶交ですからね。手を離してあげると、わかってるっつーの、とぶっきらぼうに言葉が返ってくる。

わかっているならよろしい。僕は目の前で演説をする副校長先生の言葉に耳を貸す。他にやる事もありませんし。

……と、そこで「次に――」と云う言葉が入る。まだ続くのかな？　そもそも、途中から入ってきたからわからないけど、どうして校長先生じゃなくて副校長が言葉を発しているんでしょうか？

あとでユカに訊こうと思い、一瞬下に向けた視線を上にあげて、壇上にあがっていく次の人を視る。

あれ、普通の生徒さん……？

「それでは、次は中心生徒会長の、織部イザベラくんによる入学祝いの言葉です」

「え、中心生徒会長？」

思わず声に出してしまった口を押さえて、目を視開く。

えーと、さっき出会った藤咲さんが生徒会長――――ん？　そういえば生徒会長って着く前に何かが着いていたような気がしない事もないです。なんでしたっけ？

「うよーく」

後ろからノゾミさんのラップ調の呟きが響いてきて――――ああ！　そうでした！　右翼生徒会長って言っていました！

つまり、今目の前に居る中心生徒会長さん……この学校って、二人も生徒会長さんが居るんですか！？

「ノット。この学校には、三人の、生徒会チョーがシットしてんだZE」

「さ、三人も居るんですか……」

それもどうかと思います。

資料によればこの学校は生徒中心の運営学校で、教師の方々はあくまで、授業を運営する人間であって、風紀、行事――――様々な事柄を生徒会が掌握しているそうです。生徒会長は事実上、この学校を支配する人間になる……とは言い過ぎでしょうか？

とにかくっ、生徒会長さんが凄くこの学校において、周りの学校と違って相当の権力を持っている事は確かです！　三人も居ると色々と問題があるんじゃないんでしょうか。

うーん、一番の問題は、政治と同じで自分のやりたい事と、他人のやりたい事が違って、衝突する事かな……それしか思い浮かばない自分の低能を少し叩く。でもそれぐらいしか生徒会長で出来る事は、いくら権限があるからって、ないような気がするんだよなぁ。逆に、以上、何かが出来るのなら教えてもらいたいくらいだよ。

考えている間にも、例の中心生徒会長さんは言葉を発している。当然、耳に入っても、脳を経由せずにそのまま逆の耳から飛び出ていく。今は理解している暇はないんです！　僕の頭のHDをフル回転して、他に出来る事を考えているんですから！

……だ、駄目だぁ、全く思いつかない。普通の学校とは違うと仮定しても、駄目。普通過ぎる学校の出身ですから、変則の学校の違うところを理解するには経験と情報が足りなさ過ぎる。考えるの、明日でも夜でも良いかなぁ？

ふと、顔をあげて前を視ると……ユカが僕の顔を覗き込んでいる。うわっ！　びっくりしたー……ってあれ？　皆さんどこに行くんですか？

「演説終わったつーの。何をぼうっとしてんだよ。次、待機室に戻るんだよ」

「え――――えー……」

どうやら中心生徒会長さんの言葉の間、ずーっと、学校の生徒会長さん三人が出来る権限についてを考えていたみたいです。

顔が赤くなっていくのを感じながら、僕も後ろを

振り向いて、待機室まで行く事に――あ。

「その待機室って、どこ？」

僕とノゾミさんの疑問に、ユカは呆れて顔を片手で覆った……